

園番号 710

令和3年度 奈良市立高円こども園 研究実践概要

園長名 神田 美智代
全園児数 107名

1. 研究主題

「たくましく、しなやかな心と体を育み、生き生きと活動する子どもを目指して」
～ひと・もの・こと との関わりを通して～

2. 研究年度

2年度

3. 研究主題設定理由

初年度の取り組みの中で、継続することの難しさが課題となった。しなやかな心と体を育むことを意識し、0歳児から5歳児の発達を確認・共通理解し、具体的な保育内容(遊び、環境など)園全体で探り、さらに深めていきたいという思いから設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

身近な環境(ひと・もの・こと)との関わりを通して豊かな心と体を育て、自尊感情(自己肯定感)を高める関わりを工夫しながら、意図的に取り組み、生き生きと活動できるような保育内容や環境構成の在り方について探る。

②研究の重点

- ・乳幼児の豊かな心と体を育むために、発達や課題に応じた保育内容の充実や遊びを見取りながら、それに応じた環境や援助の仕方を探る。
- ・0歳児から5歳児までの発達過程を理解し、乳児期から幼児期に繋がる保育を探っていく。
- ・職員間の連携や共通理解を図りながら、具体的な取り組みの方法を探り、保育の質の向上に繋げる。

③活動の方法

【0歳児】 「太鼓したい！」 7～12月

7月、園生活や保育者に慣れてきて、太鼓遊びを楽しんでいた。その後9月に5歳児の太鼓演奏を見せてもらってから、太鼓の玩具を机の上に乗せ、5歳児のように立って叩こうとする姿が見られた。そこで5歳児の使用していた楽曲で遊べるようにしたところ、バチ同士を合わせたり、曲の終わりに「ヤー」と手を挙げたり、新たな動きを楽しむようになった。12月に、立って叩けるよう大中小の太鼓を作ったところ、膝を使ってリズムを取りながら叩く姿や、バチを出してきてCDデッキを指さし、太鼓遊びの音楽をかけてほしいことを伝える姿が見られるようになった。また低月齢児も、高月齢児の遊ぶ姿を見て太鼓遊びに興味を持ち、座ってバチを持って、しっかり太鼓の面をめがけて叩けるようになった。



〈考察〉

太鼓遊びを楽しむ中、実際に5歳児の演奏を見せてもらったことで、子どもたちなりに刺激をたくさん受け、太鼓遊びのイメージがより具体的になったと考えられる。また子ども達の興味や思いに合わせて曲を用意したり太鼓の大きさを変えたりしたことで、膝や腕を使って楽しむ姿や、曲をしっかり聞いて叩く姿につながり、自ら太鼓遊びをしたい思いを身振

り手振りで伝えようとする意欲的な姿にもつながったと思う。

【1歳児】 「よーいどん！」 12月

気候が良くなった秋口から、積極的に園庭へ出て体を動かす機会を設けてきた。サーキットやボール、鉄棒などを用意し、子ども達が体を動かしてみたいと思える環境づくりを進めてきた。バランスよく体を動かせるようになってきた高月齢児を中心に、「走る」という動きを取り入れたかくれんぼや追いかけてっこに誘いかけてみるようにした。月齢も高く、活動的なA児とB児を中心に



大きな声を出して喜び、汗ばむほど遊びを楽しむようになった。最初は外へ出た時に、保育者が「もーいーかい、しよう」とか「よーいどん、する？」と誘いかけていたが、何度もそれを繰り返すうちに、外へ出ると保育者の所へ来て「せんせ、しよう」と言いながら保育者の手を引っ張る姿が見られるようになった。また、保育者と走って楽しんでいる友達の姿を見て、低月齢児も、自分のペースでかくれんぼや追いかけてっこを楽しんでいる姿がみられた。

〈考察〉

保育者が鬼になって追いかけてっこやかくれんぼをする事で、楽しんで体を動かす経験が出来たと思う。サーキット遊びで少し高い台によじ登りジャンプしたり、平均台でバランスをとる事を楽しんだりするうちに体幹がしっかりし、階段の昇り降りなどもふらつく子が少なくなった。保育者が共に遊びを楽しんだ結果、子どもと保育者の関係も深まり、「楽しかった」経験が積み重なって、「やりたい」気持ちが高まり、保育者に自ら誘い掛け楽しもうとする姿につながってきたと考えられる。

【2歳児】 「みんなー、てつだってー」 1月

体づくりのために、4月からサーキット遊びに取り組んでいる。繰り返し遊ぶ中でやってみたい遊具を保育者にリクエストしたり、準備や片付けを喜んで保育者と一緒にする姿が見られるようになってきたので、今まで楽しんできた運動遊具を子ども達が自分たちで出したり、並べたりできるように環境を整えた。ある日、A児とB児がエス棒やウレタン積み木を並べ、跳んだり渡ったりして遊んでいた。「これも出したい」とウレタン積み木よりも更に大きくて重い台を押して運ぼうとするが重くて動かない。するとB児は砂場で遊んでいる友達の方を向いて「みんな、きてー」「みんな、てつだってー」と何度か呼ぶ。すると他の2人が加わり、4人で台を押すとやっと少し動き、「動いた！」と嬉しそうにしながらウレタン積み木の近くまで運んだ。その後手作りのサーキットを繰り返し楽しんでいた。



〈考察〉

姿勢の保持が難しかったり、気持ちの切り替えに時間がかかったりする子どもが多かったことから、体づくりのためにサーキット遊びや様々な運動遊びを繰り返し楽しんできた。サーキット遊びでは最初は自信が無かったり、「ぼくがさき！」「わたしがしてるの！」とトラブルになったりしてすぐに心が折れ、続かないことが多かった。しかし、保育者と楽しさを共有しながら一緒に遊ぶことで気持ちが安定し、自分自身が満足して遊ぶ経験を重ねたことで、友達にも目が向き、自信を持って意欲的に遊ぶ今回の姿に繋がったのではないかと考えられる。

【3歳児】 「大きなタライをよいしょ・・・」 7月

タライに溜まった水の中に砂を入れたり、トイの上から水を流したりして、一人一人自分のしたいことを試しながら水遊びを楽しんでいる。ある日、保育者がトイを砂場の横へ移動すると、子ども達はいつもと同じように水を流して遊びだした。すると、砂場にできた小さな水たまりに入り、パシャパシャと水しぶきを立てながら喜んで遊んだ。ホースの

水を直接水たまりに向けたり、バケツでタライの水を運んだりして、水たまりがどんどん大きくなってきた。保育者がタライに水を溜めて、一気に水たまりに流し入れるとさらに水が増え、子ども達の足首が隠れるほどになった。タライの水を入れる保育者の姿を見て、「〇〇もしたい。」とA児が言い、水の入ったタライに手をかけたが重くて動かない。それを見て、「〇〇

もする。」「いっしょにしようか？」と、一緒に遊んでいた子ども達がA児と一緒に水の入った重い大きなタライを力いっぱい持って、ひっくり返した。水が勢いよく流れて、子ども達が足を浸けている大きな水たまりに波が立ち、水も一気に増えて、みんな声をあげて喜んで遊んだ。



〈考察〉

それぞれが自分の好きな場所で水遊びを楽しんでいたが、遊びの中で偶然にできた水たまりに子ども達が興味を持ったことをきっかけに、そこに水を流し入れ大きな水たまりができた。水がどんどん増えてくるワクワクと、保育者がタライの水をひっくり返す瞬間のドキドキを感じていた。

水がたくさん入ったタライは、見ている時と違って自分でやってみると重いことに子ども自身が気づいた。一人ではできなかつたことが、友達と一緒にしたこととタライの水をひっくり返すことができ、友達や保育者と共に一気に水が流れる面白さや喜びを感じる経験に繋がった。

【4歳児】 「もう一回しよう！」 12月

春よりサーキット遊び、鬼ごっこ、しっぽとり等体を十分に動かす遊びを楽しんできた。また、友達と一緒に同じことを経験出来る機会を増やしたり、ルールのある遊びを取り入れたりしてきた。その中でもしっぽとりゲームは子どもたちのお気に入り何度やっても「またやりたい！」と言って一年を通して遊びに取り入れてきた。初めはグルグルと同じ方向を向いて走り回ることを楽しんでいて、少しずつ手をめいっぱい伸ばして手早く取ったり、止まって走ってくる友達を待って取ろうとしたり等、一本でも多く取りたいと思って自分なりに工夫する姿が見られるようになってきた。また、初めのうちは走ることが速い子だけがたくさんのしっぽを取っていたが、繰り返し遊ぶうちにしっぽを取れる子が増えたり、最後まで逃げ切れる子が増えたりしてきたことで、みんなと一緒に遊ぶ楽しさを感じながら遊べるようになってきている。

〈考察〉

しっぽとりゲームを通して体を十分に動かす楽しさを感じながらも、力加減、走る速度や体勢の調整等身に着けていくことが出来た。他にも体を十分に動かして遊ぶ機会を増やしてきたが、得意なことだけをしようとしたり、「出来ない」と諦めてしまったりする等の姿がみられた。その都度、保育者が一緒にやったり、少しでも出来た姿を認めたりすることでやってみようとする姿が見られるようになってきた。また、保育者が一人一人の姿を認め、褒めてきたことで子ども同士でも他児を認め、受け入れて一緒に遊ぶ楽しさを感じられるようになってきている。

【5歳児】 「明日もドッジボールしような！」 12月

1学期から共通経験でドッジボールを楽しむが、その後、子ども達から遊び出すことはなく、保育者がコートをかき準備を始めると「ドッジボールするの？一緒にしよう！」と意欲的であった。保育者も遊びに入ると楽しむが、1回で終わり遊びが続かなかった。2学期中頃、「ドッジボールしよう」と誘い合う事が増えてくる中、チーム分けの方法やルールの確認を自分達で出来るように促し見守っていく。12月頃には、進んでコートをかき得点表を用意してクラスの半数以上で繰り返し遊びを楽しむようになる。体幹がぶれずにボールを片手で力強く投げ、ボールを胸でしっかり受けるようになってきた。遊びの終わりには「楽しかったな！明日もドッジボールしような！」と声を掛け合う姿が見られた。

〈考察〉

ドッジボールで集団遊びの楽しさを感じ、自分達で遊びを進めていく経験をしてほしいと願うが、初めは、「どうやって遊び始めたらいいのかわからない」「ボールをうまく投げられない」「ボールに当たったら痛そう」「ルールがわからない」などの理由が感じられ、なかなか子ども達だけで遊びが続かなかった。2学期の行事で友達と力と気持ちを合わせることの経験や、日々のリズム遊びやサーキット遊び、縄遊びの経験から見られる体幹の育ちからドッジボールを楽しめるようになってきたと思う。体の様々な部分を使って力を入れたり抜いたりすること、俊敏に体の向きを変えたりする動きも存分に楽しみながら、自由選択活動の大半の時間をドッジボールで楽しみ、また、チームで力を合わせることや励まし合う事、認め合う姿が見られるようになったことは年長児のこの時期ならではと考えられる。

【長時間保育】 「コマまわし」 1月

長期休業期間にわくわく（異年齢児交流）活動を計画し、3つのグループに分けて少人数で互いを知り関われるようにした。いつもと違う部屋・先生・友達に、最初は戸惑う子ども達だったが、回を重ねる度に「〇〇さんと一緒」「△△さん何しているのかな」という気持ちが広がってきた。コマづくりをした時、年長児が色々な色のペンを使ってカラフルに塗っていた。年少児は、「わー、きれい」と真似をしながら同じように塗ろうとする。塗りあがったコマをみんなで回してみる。コマがよく回るのを見て「やっぱりお兄ちゃんはすごいな」と言われた年長児は喜びながら照れていた。その後、コマの回し方を教えてもらい繰り返し練習していた。周りがしていて面白そう、楽しそうと思っていることを、自分の中に取り入れていこうとする自発的な模倣活動やイメージを共有する場になった。

〈考察〉

異年齢児交流活動をすることで、今まであまり関わることのなかった異年齢の友達と話したり遊んだりする機会が増え、自然に関われるようになってきた。その中で、小さい子は年上の友達を見て「自分もやってみたい」と、挑戦や憧れの気持ちを持つことができ、大きい子に声をかけたり態度で示したりして優しさやいたわりの気持ちを持つなど、互いに心の成長を感じる事ができた。

5. 研究の成果

毎月のカリキュラム会議の中で記録シートを取り入れ、子どもの姿から課題を明らかにし、どんな力を育てたいのか、具体的な遊びを検討した。クラス同士の話し合いはもちろんのこと、異年齢間でもアイデアを出したり助言し合ったりしながら1年間継続して取り組むことができた。そのことで、各年齢の身体面の発達段階を再確認することもできた。

その結果、乳児では保育者との安定したかかわりの中で満足するまで遊ぶことで、意欲を育てることにつながった。幼児では、各年齢の子どもの姿から具体的な遊びを繰り返し検討し継続することで、体の使い方や力加減を調節する力が育ち、友達と一緒に活動しながら遊びを展開し楽しむ姿が見られるようになった。

6. 今後の課題

一人一人の子どもの姿からの課題やつきたい力を意識し、職員間の学びを深めるカリキュラム会議を来年度も継続して行っていく必要を感じる。その上で、職員間で検討し実践した環境構成や遊びなどの取り組みで、子ども達の姿がどのように変わるのか、しなやかな心と体を育み、生き生きと活動する子どもを育てる環境や援助の大切さを探っていきたい。